

# ウマクイク

美馬由美子



受賞のことば  
評価してくださった審査員の先生方、ありがとうございました。  
あの頃抱えていた、やるせない思いを文字にするこ  
とで、少しは昇華できたように思います。私の困難との戦  
いは、新たなフェーズに入りました。乗り越えなければな  
らない壁は、まだあります、支えてくださる方々に  
感謝つつ、誠実に謙虚に、そして何より楽しんで歩んで  
いこうと思っています。どんな経験も必ず力になると信じ  
て。今回頂いた勲章は、父と母へのレクイエム。

プロフィール  
エアグルーヴとステイゴールド  
に競馬の世界に引き込まれてひ孫  
から10年。今は彼らたちを応援しつつ、馬が居る場  
所でホワーンと過ごすことで英  
気を養っています。昨年は、中  
央の競馬場全10場制覇を達成！

木々の葉をサラサラと揺らしながら、やわらかな風が  
流れ込む。

棚には、細長く削った竹を複雑に組み合わせた花籠や  
物入れ、幾何学的なオブジェ。一角には、様々な道具や  
書籍などが所狭しと並んでいる。

コウは、ここ別府の古民家に工房を構え、日々、竹工  
芸の作品を創っている。

高校を卒業して数十年。大成した同級生。あの頃は、  
私も無限の可能性を持ち、明るい将来を思い描いていた。  
が、今は。みんなと差がついてしまった……。

複雑な思いにかられた。自分のこれまでの歩みを振り  
返る。胸を張れる歳月を過ごしてきただろうか。成長し  
たのだろうか？いや。目の前のことだけに対峙し、漠然  
と流されて生きてきた。

突然にも関わらず、コウは歓待してくれた。  
古民家を利用した工房。一歩足を踏み入れた瞬間、涼  
しい空気に包まれた。大きく開け放たれた窓から、やわ  
らかな風が吹き込んでいる。

玄関の横には、昔、厩だったと思われる場所が、そ  
のままの形で残されていた。馬がお尻をこすりつけていた  
と思われる壁。少し表面が削れ、黒っぽくなっている。  
馬栓棒には、馬が齧ったと思われる形跡も。人間の住居  
と同じ屋根の下に馬の住居があるのは、馬を家族として  
大切にしていた文化だ。

工房内には、様々な形のオブジェ。竹の融合体である  
作品たちが放つ強いオーラに、圧倒される。作品作りの  
発想はどこから生まれ出されるのだろう。コウは『人と違  
う新しいもの』を作り出すことにこだわっている、と言

つた。さらに、心の中にわだかまりや迷い、不安など負  
の要素があつたら、作品に出てしまう。負の思いはリセ  
ットしないと良いものはできない、とも言つた。

同窓会では、コウ以外にも大成している同級生が何人  
もいた。世界中を飛び回り、日本の外交を支えている同  
級生、保健衛生センターの所長として七十人の部下を抱  
えている同級生、老けた風貌故、『おとうさん』と呼ば  
れていた同級生は、今は裁判官をしていると言つた。

「モデル？」  
「来てくれたら紹介するよ」

同窓会での再会から二ヶ月後の初夏。コウの言葉を真  
に受け、ぷらっと別府の工房に来てしまった。

わだかまり——。今回、急に思い立ち、別府に来たの  
には、訳があつた。わだかまりが、あつた。  
現実に対するやるせなさ。近い未来への不安——。

私の鞄にぶら下がっている『ウマクイク』を見てコウが言つた。

「そいつ、見に行く？」

工房裏の放牧地で、茶色い馬が一頭、草を食んでいた。さほど広くない放牧地だが、工房から一番遠い場所で、こちらに尻を向けていた。

「おーい、チャー」「チャー」

コウが叫ぶ。

「あの子、チャーって名前？」

「そう。茶色いからチャー。単純すぎる」と笑つた。

チャーは、呼びかけに全く反応しない。自分の世界に誰も入れない、と言つてはいるように見えた。

「かわいくないんだよね。愛想が無い。人間が嫌いなのかな」

「競馬とかやつてた馬？」

チャーは、この古民家のオーナーが知り合いから譲り受けたとのこと。十五歳くらいの驅馬ということしか、わからぬ。これまで、どこで何をしていたのか。人に懐かないから、虐待されていたのかもしれない、とも。

草をむしりてチャーに振つてみるが、相変わらず、こちらに尻を向けたまま。

しばらくして

「中でお茶しよう」

私は申し訳なく思つたのか、そう言つてくれたが、私はその場に居たかった。

「じゃ、飽きたら中に」

と言い、コウは工房へ戻つて行つた。

と私。かすかに、緑と土とボロの入り混じつた匂いがして、いた。

気持ちがわからない。ただ、今の状況を誰かに知つて欲しい、とは思う。

「チャー、疲れちゃつた」

相変わらず、こちらに尻を向けているチャー。私はチャーに背を向け、牧柵にもたれた。

空が青かつた。

ここには、穏やかな時間が流れている。

「チャー。君は今まで、どこでどんなことをしてきたの？たくさん苦労してきたのかな。君の苦労は、誰も知らない。君の気持ちは、誰にもわからない。でも君は何も訴えない。有名な競走馬や、オリンピックで喝采を浴びる競技馬と自身を比べたりしない。こうして淡淡と生きている。チャーは頑張った時、褒めてもらえた？」

「……チャー、あのね、私ね」

心の中に散らばっていた言葉が、次々と溢れ出す。

今年になつて、突然、両親の介護が始まり、生活が一変したこと。やらなければならない膨大なことの数々。

目の前のこと、先のこと。一人で奔走していること。

寝たきりとなった父の顔を見るとやるせない気持ちになること。認知症が進み、同じことばかり言う母には、ついキツイ口調になつてしまふこと。その都度、母に対する申し訳ない気持ちと、自己嫌悪に苛まれること――。

完全に独り言。愚痴。

「チャー」

チャーの鼻先にそつと触れてみた。やわらかくて、温かい。

チャーは、そのやわらかな鼻先で、私の鞄にぶら下がつて『ウマクイク』をチョンチョンと二回つづくと、大きく鼻息を吐いた。

「これ、チャーだよ。似てるね」

風が、チャーの鼻先を通り抜ける。

再びチャーに触れようと手を伸ばした。チャーは、その手を避けるような素振りをし、元いた場所に向かい、歩いて行つた。

蹄が地を踏みしめるやさしい音が、ゆっくり遠ざかっていく。

考え過ぎるのはやめな、とチャーが言つてはいる気がしないことではない、と自分に言い訳して。

介護に直面している人、あるいは、それ以外の問題に対峙している人も、こんな気持ちを抱いているのだろうか。

私は、ねぎらつて欲しいのだろうか？感謝の言葉が欲しいのだろうか？手助けして欲しいのだろうか？自分の

鳥の轡りが、心に沁みる。

チャーの丸い尻に向かい、呟いた。

「そうだね。きっと、上手く、いく」